

日本名婦伝

谷干城夫人

吉川英治

青空文庫

白い旋風^{つむじ}を巻いて「戦^{いくさ}」が翔^かけてくる。——五十年めの大雪だという雪かぜと共に、薩^{さつ}摩^まと肥後の国境を越えて。

明治十年の二月だった。

時の明治政府へ、

「具申^{ぐしん}尋問のため」

と唱^なうる薩^{さつ}南^{なん}の健児^{けん}たちは、神とも信賴^{しんらい}している西^{さい}郷^{ごう}隆^{たかもり}盛^{もり}を擁^{よう}し、桐野^{きりの}・別府^{べつふ}・篠原^{しのはら}などの郷党^{きやうとう}の諸將^{しよしやう}に引率^{しんそつ}されて、総勢^{そうせい}三千四百人を、二大砲隊^{だいぱうたい}十六小隊^{じゅうろくせうたい}に組織^{そくし}し、

「百難道^{ひゃくなんだう}をさえぎるとも！」

と、決死^{けつし}の誓^{ちか}の下に、上京^{じやうきやう}の目的^{もくてき}を抱^{かか}いて、すでに鹿兒島^{かぎしま}を立つていたのである。

が、この熊本^{くまもと}には、官^{くわん}の鎮台^{ちんたい}がある。彼等^{かれら}の通過^{つうくわう}をゆるすべきか拒^こむべきか。鎮台^{ちんたい}の意志^{いし}は問題^{もんだい}なく、

「たとえば陸軍^{りくぐん}大将^{だいしやう}であろうと、西郷^{さいきやう}はすでに閑職^{かんしやく}の人である。のみならず私兵^{しへい}を組織^{そくし}し、

純然たる軍備をもつて上京するなど、由々しい国憲の違反だ。正当な下意上達とは認められん」

というに一致していた。

また、——箇々の感情としては、

「薩南の健児に血があるというなら、熊本の男児にも鉄石の心胆がある。憂国の赤心は、彼のみのものではない」

とも云つて、各、悲壮な決意を、鎮台の司令部——熊本城のひとつに蒐^{あつ}めていた。

——こうした中に、熊本の町は、十八日の黄昏^{たそが}れを落した。人影はおろか、いつもの灯も見えない。ただ暗い雲の吐く粉雪のけむりに全市は霏^ひ々と顫^{おの}いていた。

二

「お支度はできましたか。もうやがて七時に近うございましょう」

もう数日前から市民はあらかた避難し尽している。この宵、人声の聞えたのは、鎮台将校の官舎となっている士族町だけだった。

「お宅様も、お片づきですか」

「はい。まるで旅立ちのように」

和やかな笑い声さえ聞えた。恐いとか、悲しいとか、寒いとか、そんな日頃の観念は誰の頭にもとうになかった。

今日、鎮台からの達しには――

婦女子、老幼、病人等ハ可相成ハ、近郷ノ縁類ヘ避難サレタシ。唯、ヤムナキ事

情ノ者ト、俱ニ死ヲ厭ワザル家族ノミハ、今夕七時迄ニ鎮台内ニ引揚げラルベシ

と、あつた。

鎮台の軍議は、籠城と決定らしい。良人の方針を見とどけないうちとはと、将校たちの夫人は、最後まで家庭に踏み止まっていたのである。そしてわずか半日の間に、各、一切の後かたづけをすまずと、

「もう心残りはない。後は、良人と共に」

と、心のひとつな婦人ばかりが結束して、頭巾や簑笠に身をつつみ、命令の時間までに、鎮台へ行こうと誘い合せているのだつた。

その中に、鎮台司令官の夫人、谷玖満子もいた。

玖満子は、自分の邸やしきのことといつては、何も顧みている間もなく、毎日、良人の同僚の家庭を見舞っていたが、今日はなおさら、大きな責任を感じているらしく、

「おや、与倉よくら様の奥様が、まだこの中に、お見えにならないではありませんか」

と自身で、少し先の門まで、様子を見に行つた。

第十三聯隊長の与倉よくら知実ともざね中佐の夫人は、妊娠していて、折も折、臨月に近いからであつた。

「田舎いなかへ避難あそばして、お健すこやかに、お産をお果しになるのも、御主人への貞節ではございませんか」

と、玖満子くまこをはじめ、人々はみな切にすすめたけれど、与倉夫人鶴子は、

「だいじょうぶです。武人の子ですから、胎内にいるうちに、大砲の音を聞かせておくのもよいことです。籠城中の良人もまた、いつ戦死なされるか知れませんし、誕生の時、一目でもお見せできたら、父も子どもも、どんなに満足か知れますまい」

そういつて肯きかなかつたのである。

けれど、何といつても身重なので、支度に暇がかつたとみえる。

——玖満子が、門前から声をかけると、

「はいただ今、妹に藁わらぐつ沓をはかせてもらっておりますから、すぐに参ります」

と、玄関のあたりで、返辞が聞えた。そして間もなく、

「お待たせいたしました」

と、妹の幹子みきこに援けられながら、雪の中へ歩いて来た。肩を丸くつつんでいるみの簑の厚さにも、雪の冷えを胎児に及ぼすまいとする心づかいが見えていた。

三

城の近くまで来ると、下馬橋げばのはしの濠外ほりそとに、一小隊の兵が迎えに出ていてくれた。

白鷺しろさぎの群れのように、婦人たちの一隊は、鎮台の山にかくれた。

城内の一廓には、彼女たち以外の婦人や将士の家族もたくさん引揚げて来ていた。広い床むしろに蓐むしろをしいて雑居していた。

「これからは、お城中が一族ですね」

「たいへんな大世帯ですこと。どうぞよろしゅうお指図くださいませ」

何か冗談のようでさえあった。お互いに心を明るくするように努めているのかも知れな

い。和やかな笑いが急に増した。

「ここは陽気がいい。女子たちのほうが元氣じゃないか」

大きな声が室外にひびいた。振向くと、司令官の谷干城たにたてき少将が、参謀の児玉源太郎少

佐、樺山資紀中佐など幕僚かばやますけのり五、六名といっしょに、廊下に立っていた。

聯隊長の与倉中佐も後ろにいた。大勢の婦人たちの中に、中佐の眼はすぐ妊娠している妻のすがたを見出していたらしかったが、気づかない顔していた。

いや、谷將軍のすがたに向つて、婦人たちは一斉せいに両手をつかえていたから、鶴子夫人も良人の中佐へ眸ひとみを上げていられなかった。

谷干城は、その礼を、にこやかな眼にうけて、

「この度は、ぜひなき場合となりました。私情としては、誰方どなたへも等しくお気の毒にたえんが、武人の妻たる高い理想からいえば、一死を俱ともに邦家へ捧げ得る機会に恵まれたことはむしろお互いの歓びとも申したい。——国憲擁護こっけんようごのため、国体の本義に立つて、われわれは城と共に最後の最後まで戦わずには措かん。賊軍の一兵も台下を通過させん覚悟でいます。……が、孤城よく幾日を支えうるか。籠城戦は根気こんきだ、また、食糧その他一切は自給自足だ。日常、家庭での御内助をここ一城に集めて、あんた達のお力にまつ任務も多

い。元よりこれへお越しの上は、疾く決死の覚悟は極っておられようが、不肖、鎮台司令官として一言申しあげておく」

重厚な彼のことばが結ばれると、しんとしていた人々の中に嗚咽おえつの聲が微かに流れた。

「では。参謀副官——」と、將軍は、児玉少佐を顧みて、

「病院とか兵站部へいたんぶとか、婦人たちは、それぞれ適宜な部署へ分けて、なるべく、危険に曝さらされんように、明日でも配置してくれんか」と云った。

「承知しました」

「妊娠中であるとか、乳のみ児を抱えているとか、また、老年の婦人には、特に注意してやってください」

「はつ。……自分も充分注意しますが、婦人たちの統率はやはり婦人がよいかと思われます。閣下の奥様ともよく打合せてやることにいたしましょう」

すると、与倉中佐が傍らから云った。

「——だが、児玉少佐、閣下の奥様はどこへ来ておられるのか。お姿が見えんじやないか」
「えつ、この中に、お在でないって？」

「ウむ。先刻からそれとなく見ておるんじやが、何処にもおられん」

急に人々は顧み合つた。将校たちも大勢の上をつぶさに見廻した。

「わたくし達と御一緒に、お濠の下馬橋^{げばのはし}までは、与倉様の奥さまを宥^{いた}りながら確かに歩いておいで遊ばしたのに」

と、共に邸を出て来た婦人たちもさわざ出して、もしや途中で何か禍^{わざわ}いにでも遭つたのではないかと憂い合つた。

そこへ聯隊副官の平佐中尉が駈けて来て、

「閣下。ただ今、岡本軍曹が歸つて参りました」

と、告げた。

「何。岡本が歸つて来た？ 一人か」

將軍は、そう聞くと、人々が憂えている夫人の事は、意に介^{かい}しないもののように、司令部の方へもどつて行つた。

四

雪や泥にまみれた姿のまま、岡本軍曹は司令部の一隅に直立していた。

彼は俵夫（しやふ）の身装（みなり）をしていた。川尻方面の動静を探るために、三等出仕の烏丸（からすまる）一郎とふたりで、昨日から敵のなかへ深く這入つて行つたが、烏丸が薩軍の哨兵（しょうへい）に発見されて追われたため、彼はひとりとなつて辛くも復命に歸つて来たのであつた。

「賊軍前衛の別府隊は、今夜、水俣（みなまた）に宿泊し、あすは川尻まで前進するかと思われまふ。第六第七の二箇大隊で、千六百人の主力です。——一方、桐野・篠原・池上隊などは、玖（く）満（ま）（球磨）川（がわ）を下つて八代（やつしろ）へ向つています。西郷殿の所在は確（しか）とわかりませんが、横川に宿営したのが事実のようであります。——そして薩軍がこの熊本の中へ侵入して来る日は、多分、二十日の午前中になるかと考えられます。——以上、終り」

谷將軍と幕僚のすがたを前に、岡本軍曹は一息に報告した。

「御苦労だつた」

將軍は、彼の労を宥（いたわ）つてから、

「烏丸はどうしたか」

「賊兵に発見されて、追ひ廻されましたが、貴様だけ逃げろ逃げろと、彼が叫ぶので、報告も大事と、先へ走つて来ました」

「では、捕虜になつたか」

「いえ、敏捷びんしょうな烏丸のことですから、逃げきつたろうとは思いますが、もう到る所に、賊軍の偵察隊や哨兵が出ていますから、どうかと、途中が案じられます」

その時、司令部の窓外で人声がした。下士官や婦人達が、樺山参謀かばやまを呼び出して訴えているのである。將軍の夫人玖満子くまこがどこを探しても見当らない。どうか鎮台の外へも兵隊を出して、手分けして探していただきたいという一同の嘆願を伝えて来たものだった。

その声を小耳にはさんだか、谷將軍は次の室へ足を移して来た。そして副官に告げて一小隊の兵をそれぞれ変装させて、城外へ急派することを命じた。

が、それは、玖満子夫人の搜索にではない。——三等出仕の烏丸一郎を救援のためにであつた。

「はつ。承知しました」

高橋少尉の小隊が去ると、樺山参謀は谷將軍へ向つてすぐ進言した。

「奥さんの身も、一同が心配しています。誰か数名、城外へ見せにやりましょう」

「要いらんことだよ」

谷將軍は笑つた。

「あれは君も知つとるように、存外、暢のんきもの氣者じゃからね、何か、気まぐれに道くさでも

しておるに違いない。ア。——それよりは、児玉君、奥君、林大隊長も、参謀室へ集まってくれんか、作戦上ちと協議したいことがある」

五

蠟燭ろうそくの灯を置いて、卓上には一面の地図がひろげてあつた。谷將軍を中心に、幕僚の顔がそれに集まつて、小声になにか熟議していた。

と、背後の灰暗ほのぐらい隅で。

誰か、人の気はいがするようだった。そしてバチバチと炭火すみびの匆はねる音がした。

樺山中佐は、卓上の地図に寄せていた眼をちらと振向けて、

「誰だ。——弁蔵べんぞうか」

「はい。小使でございます」

老小使の弁蔵は、炭バケツを下に置いて、姿勢を改めていたが、それきり何も云われないので、また、大火鉢の薬罐やかんへ水をさしたり、番茶道具を運んで来たり、物静かに用をしていた。

小使の弁蔵爺やは、將軍がまだ高知県少参事しょうさんじだの台湾総督参謀だのを、転々と歴任していた頃から、馬丁として家庭に仕えて来た忠実者だったが、もう年を老とつて、馬の先にも駄けていられなくなつたし、機密の多い司令部付の小使として使うには、安心できる人間なので、去年將軍が台湾から熊本へ赴任して来た時から鎮台の方で雇うことに改めてやつた者である。

だから弁蔵爺やだけには、幕僚たちも何の警戒の必要をも感じなかつた。とはいえ、その晩の協議は、作戦上重大な機密でもあるので、彼がそつと出入りすることに冷たい外氣が入口から流れこんで蟬燭の灯がゆれると、そのたびごとに幕僚たちは知りながらも、つい後ろへ眼をくばつた。

「弁蔵、用事があつたら呼ぶから、小使室へ退がつておれ」

「……はい。はい」

弁蔵はすぐ室外へ出て行つた。けれど小使室には戻らないで、まだ粉雪の舞っている闇の夜空をながめていた。そしてしばらくは参謀室のほうに心をひかれているふうだったが、突然、厩うまやの手綱を断つた悍馬かんばのように、鎮台の丘から下へ向つて駆け出した。

六

小使室を借りて、手足を洗ったり、軍服に着更えたりしていた岡本軍曹は、さつきから弁藏爺やの挙動に不審を抱いて、司令部の横に佇^{たたず}んで、彼の様子を監視していた。

岡本軍曹も、日頃ならそんな心はうごかなかったかもしれないが、自分自身がおとといから敵地にはいつて、密偵の重任を果し、九死に一生を拾って帰って来たばかりの昂奮がまだどこかにあつたので、弁藏爺やの行動にも、すぐ同じことが考えられた。

「あつ、変だぞ」

咄^{つぶや}くと、崖の際まで駈けて、木の間から見送っていた。

爺^{おとこ}やの影は、老人とも思われないほど、精^{せい}悍^{いかん}でまた迅^{すみ}かった。壮年の頃から長年、馬の後^{あと}前^{さき}について駈けた脛^{すね}の面影がある。しかし、その敏捷さは、岡本軍曹の疑いによくい自信を抱かせた。

軍曹は咄^{とつさ}嗟^さに、

「彼奴^{きやつ}。敵へ何か漏^もらしに行つたな！」

賊軍のまわし者と信じたのである。軍曹もすぐどこかへ駈けて行つた。と思うと、一挺

のスナイドル銃を持って、大手の坂道を駈け降りていた。

参謀室の地図の面に、白い息を見せて、静かに協議していた人々は、ふと、蠟燭の光から顔をそむけて、

「おつ、小銃の音が？」

と、耳をすました。

どこかで一発の銃声はたしかにしたようだったが、それ限りもとの静寂しじまに返った。

「……この際です、見て来ましょう」

与倉中佐よくらは出て行つた。

小銃一発といえ、鎮台の全神経は忽ち沸いていた。中佐の眼には、駈け集まった大勢の兵に擁せられて、昂奮しながら坂を上がつて来た岡本軍曹の影が見えた。

「今の小銃はどこで撃つたのだ。賊兵か、鎮台の者か」

「わたくしが撃ちました」

岡本軍曹は、毅然きげんと前へ出て、小使の弁蔵を間諜と認めたという理由を陳べていた。

谷玖満子夫人は、夕方誘い合せた人々が、無事に鎮台へはいったのを見届けると、またわが家の方へ引つ返して、それから約二時間も経つてからただ一人で再び熊本城の丘を登つて行つた。

飯田丸の下まで来ると、小銃の音が聞えた。べつに心になけなかつたが、少し行くと、石段の下に倒れている人影があつた。雪のなかに踞もがいている様子が苦しげに見えた。

「あれっ、おまえは、爺やではありませんか」

彼女にはすぐ分つた。多年、家に召使つていた弁蔵である。弁蔵もその声を聞くと、
「奥さまか」

と、大きな眼をしてさげんだ。

勿もつ体たいない、勿もつ体たいない、と振ふり踞もがいて肯きかない爺やを無理に肩に援けて、彼女は雪の石段をようやく上がつて行つた。

小銃の弾は、弁蔵の腰か太ふともも股ももにあたつたらしい。子どものように痛い痛いときけぶのを、肩越しに、

「何です、鎮台の一員のくせに」

と、玖満子は叱りながら負つて来た。

司令部の前に立群たちむれていた人々は驚いて、彼女と弁蔵を取囲んだ。彼女は医官を呼びにやつて、取敢えず弁蔵を小使室に寝かせた。

一時は疑われたが、幸いに弁蔵は口がきけるので、その口述に依つて、誤解はすぐせんめ明あになった。

まったく岡本軍曹の勘ちがいで、弁蔵が小使勤務すきの隙を見て、鎮台から出て行こうとしたのは、玖満子夫人の身を誰よりも心配していたからであつた。旧主を思う情の余り、將軍にも無断で、その邸やしきまで一走り行つて安否を糺ただして来るつもりだったのである。

与倉中佐から理わけを聞いて、谷將軍も小使室の外まで来た。そして妻の玖満子を見ると、「何していたか」

と、一言叱つた。

「御心配をおかけして申し訳ございません」

玖満子はそう人々に詫びてから、

「実は皆さまのお立退きの後、邸やしきへ戻つて、し残していたお掃除などして参りました。いずれ賊軍が熊本の町へはいると、官舎なども家捜しするに違いございませんから、お手紙

や書類を焼捨て、また、取乱して逃げたと囁われぬよう、お雑巾がけまでして来たので、つい遅くなつてしまいました。——それからこれは与倉様の奥さまに差上げようと思つて、先頃、錦山神社へお詣りした時いただいておいた安産のお神符ですが、神棚から下ろして持つて参りました。どうぞ、お後で奥さまにお上げ下さいまし」

と、与倉中佐の手へそれを渡した。

將軍は、無表情に聞いていたが、彼女のことばが終ると、

「玖満子。おまえに云い渡しておくが——また、おまえから営内の婦人方へ伝えてもらいたい。——今日以後、鎮台全員は一体になつて戦争状態に入る。一体とは五体の爪の端、髪の毛一すじまでも云う。爪、髪、手、脚、各は各で生きていない。常に主体あつての手であり、脚であることを知れ。——今夜のおまえの行いの如きも、武人の妻として平素の心がけが働いたのだろうが、すでに主体の組織に参加したのだから、今までの単なる家庭の主婦というだけの観念ではならぬ。一家とか良人とかが主体ではなく、それは一単位にすぎぬ。もつとその上にある大きな主体に奉じることを念としてもらいたい」

と、諭した。

「よく分かりました。私の戴いたお叱りですが、皆さまにもその通りお伝えいたすことにい

たします」

その後を、担架たんかにのせられた弁蔵爺やが、静かに通つて行つた。鎮台内の聯隊病院は、今夜から戦時病院に編成されていた。

「爺さんが初入りの患者だぞ」

担架の毛布をのぞいて、兵隊は笑つたが、弁蔵は笑えない顔していた。

いや、それよりも、深刻な悔いおもてを面にたたえながら担架のあとから悄然と従ついて行つたのは、岡本軍曹であつた。――將軍が玖満子に告げた言葉は、そのまま彼の脳裡にも深く自省を与えていた。

八

翌十九日の朝になると、薩軍の前進は、刻々と報告され、一挙、熊本を席捲せつけんして、北上しようとする颱風のような全軍の相貌と殺気は、もう鎮台兵の肌近くひしひしと迫つて来た。

ところが、その朝の十一時頃である。

谷司令官以下、幕僚たち数騎で、市中へ巡察に出ていると、その間に、二の丸天守閣の附近から失火が起った。

雪は霽^はれあがっていたが、金峰^{きんぷおろ}風の烈しい日だった。

炎は瞬^{またた}くまに拡がって、本丸から飯田丸、獄^{たけのまる}丸の重要な建物を舐^なめつくした。一ノ

天守、二ノ天守の高楼も焼け落ちた。城下の坪井町、藪^{やぶのうち}之内、京町、塩屋^{しおやまち}町などは、飛火を浴びて一円の火の海と化してしまった。

「……ああ、何たることだ。戦^{いくさ}の前に」

ようやく、夕方には鎮火したが、消火の指揮に疲れ果てた将校たちは、焼けあとを眺めて、一時は茫然としてしまった。

——司令部ハ即時「宇土櫓^{ウドヤグラ}」ニ移ス！

——電信ノ修復ヲ急ゲ！

——糧食課員ハ至急残存ノ在庫額ヲ調査シ參謀部ニ集合セヨ！

——各隊交代制ヲ布キニ時ズツ休眠セヨ！
^{フタトキ}

——各防禦陣地ノ部署ハ寸毫變化アルベカラズ、猥^{ミダ}リニ動クモノハ嚴罰ニ処ス！
^{ボウギョ} ^{スンゴウ}

司令部付の伝令は駆けまわる。信号喇叭^{らうぱ}は高鳴る。

仰ぐと、僅かに焼け残った城廓の一端、宇土櫓のうえ高く、白い司令旗は不動の意志を示して翻ひるがえつていた。

「そうだ！ 火災ぐらいに気が挫くじけてどうする」

将士はわれに帰ると、忽ち各の任務について、最高度の活動を起した。電信は夜までに通じるようになった。兵站部へいたんぶは炊煙をあげた。婦人軍は病院に詰めたり急拵えの営舎に立働いた。

徹宵、焼けあとに働いていた工兵たちは、夜が明けると、傷ましそうに、真つ黒な喬木の梢を見上げて嘆き合つた。

「……ああ、この大銀杏おおいちようも、焦げてしまった」

それは幹の太さ五ツ抱えもある本丸前の大銀杏で、名城熊本の象徴として聳え立ち、秋となればこの大木の金葉が燦々さんさんと城下町から遠望されるので、熊本の城を称んで一名

「いちよう城」とも唱えられたほど由緒ゆいしよある樹であつた。

「人にも寿命がある。この際、樹など惜しむに足るものか。われわれの骨を焼いても、亡ほろぼしてならないものは国憲の大則だ、国体の擁護だ。そのためにはあらゆるものを戦に投げても惜しくはない」

若い工兵将校が絶叫した。工兵たちは、巨大な一本の炭と化した銀杏の樹に万歳の声を献^{ささ}げた。

それに答えるように、川尻方面で大砲の音がとどろいた。城下の各所からもバチバチ小銃の響きが起った。

薩軍の先鋒隊はすでに市街へ入って来たとも見える。

九

「鎮台司令官は、防備にのみ専念されておられるが、なぜ、進んで三太郎峠の嶮を擁し、積極的に敵を撃破するの策に出なかつたか」

これは県権^{けんこんれい}令の富岡敬明^{けいめい}が、最初、谷將軍へ詰問^{きつもん}したところである。

同様な異論は、当然、幕僚のあいだにもあつた。

——が、谷將軍には、正しい理由と信念があつた。

「鎮台兵は皆、徴^{ちようへい}兵の制で集めた民兵である。百姓商人の子弟でまだ訓練も充分でない。精鋭な薩南の兵と戦つてひとたび潰^{かいらん}乱したら殆ど脱走してしまうだろう。退いて鎮

台を守るとなつてはすでに遅い。——しかも征討総督の海陸軍は、まだ遠い神戸の埠頭に
あつて、その到着を遽かに待つことはできない」

近くの小倉聯隊へも、援軍を急派せよと、電信は打つてある。それに対して、聯隊長
心得の乃木希典少佐から、第三大隊と第一大隊とが出勤して、もう久留米まで進んでいる
という返電はあつた。しかし薩軍が全力でそれを阻めることは目に見えているので、果た
して鎮台へ合体できるか否かは、聯隊の兵力ぐらいでは多分に疑問としなければならな
かつた。

孤塁。

恃むはただ、二千五百八十名の鎮台内の者が、一心一体となつて、命を国土に帰すとい
う心になりきることしかない。それしか恃むものはない。

「開戦に前だつて、火災に罹つたのは、ともすれば他を恃みたくなる雑念を焼き払つて、
一層、われわれの信念を強固にしてくれたようなものだ。その意味で祝杯をあげ、敢えて
守勢の苦戦に臨もうではないか」

その朝、將軍は、一本の葡萄酒を空けて、幕僚一同と共に乾杯した後、宇土櫓のうえ
に登つて行つた。

焼けあとの黒銀杏くろいちようの辺で、工兵が万歳の声をあげた時刻である。

他の工兵部隊は、鎮台の麓の要所要所に地雷を埋め、防柵ぼうさくを組みまわしていた。眼で見ただけでも、市民のいない市街の屋根と、この鎮台の山とは、濠と柵と地雷とで、はつきりと区切られた攻防線に別れていた。

「……あ。糧食課の将校と輜重隊しちようたいの兵か。お、だいぶ曳いて来たな」

將軍の眼にあてている望遠鏡に、遠い市外端れの土橋や街道が映っていた。十五、六輛の車と二千頭ほどの馬の背に、米こめ吠かますを積んで来る人馬の縦隊が見えたのである。

それに向つて、田圃や人家の陰からびゅんびゅん弾たまが飛んでいた。薩兵のすがたが見えた。偵察隊であろう、薩軍のほうも人数は少ない。しかし、味方の輜重隊しちようたいは彼の抜刀群に斬りまくられて算をみだし始めた。

「与倉中佐よくらつ、与倉中佐」

櫓から下へどなった。――が、居合せないとみえて、奥少佐が駈け上がつて来た。

「おつ、君でもよい、すぐ中隊をやつて、今朝、市外へ糧食の徴発に行つた輜重隊を援護してくれ給え。もう彼処あそこの土橋まで来ておるが、賊軍の偵察隊に阻まれて危機ひんに瀕しておる」

地点を望遠鏡で見とどけて、奥少佐が駆け降りてゆくと、將軍は眼を転じて、鎮台内の西のほうを見下ろした。

野戦病院の屋根の雪も解けた。その横の丘が山砲台、その前の広場は射撃場である。つづいて西出丸の建物がある。

その辺りに、婦人たちのかいがいしい姿がたくさん見えた。ある者は白木綿で髪止めをしている。ある者は紅の襷たすきをかけ、ある者は鯉こいぐち口を着て、兵と共に、働いているのである。

焼けあとから工兵が掘起した味噌とか米俵とか、原形もなくなっている食糧の山から、なお幾分でも食べられそうな部分を選び分けているのだった。

將軍は急に胸が迫つて来た。

火災はむしろ天てん祐ゆうと先にいったが、食糧課員の調査表によると、出火前は、貯蔵精米が五百五十余石よこく、玄米百十六石一斗ととあつて、一日の消費額二十九石として、今後、約二十日間は充分支えがつくことになっていたのが、火災のため、そのうち五百石余という大部分は焼失という赤線で消されていた。

この補給をどうするか？

薩軍は怖れないが、彼の最も憂^{ゆうぐ}惧したのはその問題だった。兵隊ひとりに七合二勺五才ずつ、二千五百八十名への割当を、どこから持つて来て供与したものか。

現状の程度で幾日あるだろうか。

「——司令官、ただ今、征討軍本部から電信がありました。陸軍卿の山^{やま}県^{がた}有^{あり}朋閣^{とも}下^{しも}からであります」

うしろに電信課の書記が直立していた。

「お。そうか」

受取つて見ているところへまた、

「いやどうも、たいへんな中で大変なことが持上りました」

と、児玉少佐が、快活な笑い顔して上つて来た。

「何じゃね、大変な事が持上がったとは」

「与倉中佐の奥さんが、病院でお産したのです。男の子が生まれました」

「ほう！ 今朝の大砲の音で産気づいたな。……めでたい。早く与倉君に知らせてやりたまえ」

「先程から兵卒をやつて、すぐ嬰^{あか}坊の顔を見に来いと云つてやつたんですが、段^{だん}山^{やま}の

陣地で軍務についておる身だから、そんなものは見に行かれんという返事です。……見たくてしようがないくせに負惜しみしとるんですな。はははは」

「ありがとう」

將軍は、段山の方へ向つて、心もち頭を下げたが、屹きつと胸を正して少佐に云つた。

「児玉君。わしもお見舞に行つてあげたいが、寸時もここは離れられん。……家内は経験があるからよく産後を看みておあげするよう、君からも云うてくれんか」

昼近くなるにつれて、砲声はいんいんと震しん撼かんしはじめた。薩軍の包圍態勢はすでに整ととのつたとみえて、着弾はかなり正確となり、今し生れた呱こ々の声する産室の附近にも、幾つか落ちて土けむりを揚げた。

十

夜になると病棟の窓々は、染硝子でも嵌はめたように真赤になった。

昼間ほどではないが、相互の砲声はまだ熄やまない。市街には数力所から火災が起つてゐる。鎮台側の諸所の防禦陣地にも火の手が望まれる。

ここの鎮台野戦病院の近くでは、樹や藪が焼けていた。だが、この大きな兵火を八方に見ている眼には、煙草の火が落ちているほど誰も気にはしない。生木のバチバチとはぜる音が白い寢床ベッドの耳ちかく聞えてくる。

「……粥湯おもうを召しあがりませんか。お姉さま。谷將軍の奥さまが、粥湯を煮てここへお持ちくださいました」

幹子みきこは、産婦の姉の枕元へ、そつと告げた。

与倉中佐夫人の鶴子は、幸いにも安産であつた。今朝、味方の熊本軍、敵の薩軍、相互の砲弾がいちどに鳴りとどろく中に産氣づいて男の子を生みおとしたのである。もとより籠城中だし、軍病院ではあり、産婆などはいないので、あか児をとりあげた時の皆のあわてかたといったらなかつた。

「鶴子さま。お起きになつてはいけませぬ。そのまま。そのままで。……幹子さま、粥湯おもうは匙さじでお唇くちへいれておあげなさい」

玖満子夫人くまこのそういう姿へ、鶴子つとみは、眸ひとみだけあげて、

「すみません、戦の中で、こんなお手数を皆さまにおかけして」

「何を仰っしゃいます。それは平常のお氣がねです。この鎮台にたてこもつて一体となつ

た城中の者には、もう自分一個というものはないはずです。あなたは、陛下^{へいか}の赤子^{せきし}をお生み遊ばしたのではございませんか」

「はい。……ありがとうございます。戦のようは、どんなでございましたようか」

「御安心なさいませ。段山、藤崎台、法華坂^{ほつげざか}などに迫った敵も、もう撃退されました。

お宅さまの御主人と倉中佐どのは、午前九時ごろから薩軍の別府大隊の猛攻に当って、片^か山^{たやまやしき}邸の丘を死守しておいでになります。……あの弾^{たまおと}音がそれでございましたよう」

「主人は、わたくしの安産したことを、知っておりましょうか」

「樺山^{かばやま}中佐どのが、すぐ陣地へ行つて、お知らせ申しあげたそうです。……やがて、あの方面の賊軍が退却すれば、きつとすぐに、嬰兒^{やや}の顔を見に飛んでいらつしやるに違いありません」

「奥さま。わたくし……それを待つているのではございません。却って、そんな私事が、良人の耳にはいつては、すこしでも、賊軍に当る勇氣を怯^{ひる}ませはしないかとぞんじまして」

「そんな思い過しを遊ばしていらつしやいましたか。ホホホ、ではほんとうのことを申しあげますと、樺山参謀どのが、お宅さまの御主人へ、陣地の防戦は、一刻^{とき}交代してやるから、生れた嬰兒^{やや}の顔を、ちよつと一目、見て来ないかと、おすすめになられたところ

が、ばかを云い給えと、反対にひどく叱られたと、仰っしゃっておいでになりました。それほどの御主人さまの御意気ですのに、何で」

——その時、扉ドアの外へ、何かぶつかって来たような大きな音がした。産衣うぶぎにつつまれて
いる赤い小さい顔は衝動シヨックをうけて突然泣きだした。

「誰ですか？ ……。ここには、産婦がいっぱいいますから、静かにしてください」

玖満子夫人が、扉へ向つてたしなめると、その外で、

「お、奥さま。弁蔵べんぞうでございます。ちよつと、ちよつと、ここへお顔を……」

「えつ、爺じいやですつて？」

別の病棟に入院している老小使の弁蔵が、何しに、患者のくせに、あわただしく来たのか。玖満子はあやしみながら、ひとり扉ドアの外そとへ出て行つた。

十一

まだよく歩けもしなくせに、杖なしで、廊下を転ころげまろんで来たので、扉へぶつかる
と、弁蔵は坐つたきりになつてしまった。

「ま。どうしたんです。おまえは」

抱き起してやると、爺やは、起されながら、

「行つて……行つて見てあげて下さい。おはやく、間に合わないといけません」

「どこへ。何ですか。いったい」

「わたくしのいる病棟のいちばん奥の病室へ、た、たった今、与倉中佐どのが、担架たんかで運ばれて来ました。重……重傷だそうです」

「えつ、与倉さまの御主人が」

「御産婦に知れても、いけないだろうし、御重態の中佐に、嬰兒あかさまの泣声が聞えてもいけまいと、わざと、わたし達の病棟へ持つて来たらしゅうございます。樺山参謀も、どこか負傷なされたとみえ、軍服を真赤に染めておいですが、中佐の枕元で、与倉つ、しっかりしろと、励ましていらつしやるようで」

みなまで聞かないうち、彼女は長い廊下を駆けて行つた。

四号病舎のかどまで来ると、副官を伴つて、大股おおまたにそこへ入つてきた良人とはつたり会つた。鎮台総司令官、谷干城たにたてき少将である。

はたと、眼を見あわせたきりで。——彼女はだまって、副官のうしろについて歩んだ。

病室の内は、ひそとしていた。軍医の手当が終ったところらしい。終日の激戦に、血と泥にまみれ、さらに自身の新しい血しおに濡れた患者のうえに、手洋燈ランブをかかっていた看護卒は、ホヤの上からそれをふき消して、後へ退がった。

「どうかな？ ……助かりそうか」

谷將軍は、そこに凝ぎようぜん然と立っている樺山参謀かばやまへ、顔をよせてそつと訊ねた。

「いや。どうも、むずかしいそうです」

「いなか……」

瞬間、誰の呼吸もないようだった。將軍は、静かに枕元へ寄つて、二度三度、ことばをかけた。答えいらいもない。ただ唇くちがうごいた。そして寢床のうえの右の手がすこし動いた。挙き手の意志を示すように。

「ひと目、見せてやるわけにゆかんかなあ」

將軍はふいに大きな声で人々を顧みた。声というよりは長ちようたいそく大息であつた。寢床の上の顔にはもう変化が来かけている。秒間をあらそうものが皆の胸をつきあげて来た。

「おい。ちよつと——」

將軍は夫人を眼でまねきながら、廊下の外へ出た。樺山参謀も兎玉少佐も、軍医正もし

ずかにそこへ影をあつめた。

「玖満子。おまえはどう思うね。もう与倉君も覚悟のていだが」

「^{あか}嬰兒さまのことでございますか」

「そうだ。今しかない。与倉君父子が、ひと目会うのも、別れるのも」

「あとに遺る^{のこ}お子が御成人の後のためにも、やはりここへお抱き申しあげて来たほうがよろしいかとぞんじますか」

「ただ、案じられるのは、お産婦の奥さんだ。……どうじやろう?」

誰も答えない。軍医正の面^{おもて}には、むしろ反対の色さえうごいた。しかし樺山中佐は、やはり將軍と同じ気持で云った。

「こうしては如何でしょう。いずれお産婦の日経^{ひだち}がすぎれば、お告げしなければなりません、今は、やはり隠しておいて、何か方便をもうけて^{あか}嬰兒さんを抱いて来ては」

三浦軍医正も、そう聞くと、賛意を示した。

「それならよいでしょう。本官も憂いとするのは、何せい、今朝お産されたばかりですからな。いかにお氣丈^{つつま}でも」

すると、玖満子夫人は、慎^{つつま}しやかなうちにも、信念をもって、

「いえ、隠しても、すぐお覺さとりになりましょう。それよりは、奥さんにも御名譽を分けてあげて下さい。最大なお悲しみには違いありませんが、女だからとて、すぐ血があがるように御心配あそばすのは、如何かとぞんじます。籠城の者は、総力一体とちかいながら、それでは女子だけが、まだ数のうちに入らないことにもなりましょう」

「むむ、やはりお告げすべきだろう。武人与倉知実中佐の妻を辱はづかしめるべきでない。——玖満子、おまえ行け。三浦軍医正といっしよに」

十二

玖満子くまこは、鶴子夫人の産室までゆく間、神を祈った。

最前、鶴子夫人の健気けなげな心構えも聞いているので、信じてはいるが、もしまちがえば、産婦の一命にかかわるかも知れないのである。

女同志の慰めは、ずつとずつと、後にしよう。自分から先に泣いたり取乱れたりしますまい。今はただ与倉中佐の危篤きしこくを告げるのみでよい。最高な譽ほまれを伝える巖おごそかな軍務のひとつとして行えばよい。——が、そうできるか否か。

神のちからを彼女は祈った。——そして産室へしずかに入つて、鶴子夫人の枕頭^{ちんとう}に立つと、彼女はまったく自我もなかった。国の御為にのみある生命の一つに、同じ生命の一つが、天に代つて、冷静に、ありのままを伝えるという姿となり得ていた。

「奥さま。……与倉知実中佐の奥さま。中佐はいま、庭向うの病棟に運ばれていらつしやいました。御戦死です。……が、かすかにまだ御意識があります。嬰兒^{あか}さんを見にここまでお立寄りになつたのでございましょう。あなたは動いてはいけません。そのまま中佐の名誉な御最期へお胸のうちで万歳をおとなえ下さい。嬰兒^{あか}さんを、あなたの代りに抱いて行かせましょう。そつと軍医正におあずけください」

「……………」

二十秒ほど、産婦は睫毛^{まつげ}もしばだたかなかつた。——やがて、そのまま、

「どうぞ」

と、かすかに頷^{うなず}いた。

軍医正は、散らんとする花にでもさわるように、産衣^{うぶぎ}にくるまれた子を、産婦のそばからそつと取つて抱いて行つた。

あまりの寂け^{しず}さに、床へ泣仆れた産婦の妹の幹子は、袂^{たもと}を口^{くち}にいれたまま、咽^{むせ}び出よう

とするものを噛みこころしていた。鶴子は水のような声で、

「幹子……幹子……」

と、呼んでいた。

答えれば、わつと泣声も出てしまうであろう。幹子は起てなかった。返辞もできなかった。

「なんですか」

玖満子がたずねると、

「主人の御病室は？ ……」

「中庭の向う側の病棟です。燈ひが見えませんか」

「……見えません。おそれ入りますが、その見える窓をお開けしてくださいませ」

玖満子は、うなずいて歩み寄った。窓がひらく。彼方の病棟の燈が見える。

軍医正の影がその扉の内へ入った。扉は開かれたままとなり、室内と廊下にかけて、

肅しゆくぜん然と無言の影が整列していた。すこし離れて、枕頭に立っている影は、谷將軍らし

い。——良人の將軍は、逝ゆく良人の枕元に、妻の玖満子は、遺のこる妻の寢床のそばに。

——遠く、撃ち交わす小銃のひびきが飮くだまする。やがて熄やむ。一瞬の寂せきはく寞が夜をつつむ。

すると、彼方の病室で、

「日本、帝国つ……日本男児つ、……ば、ば、ばん、ざい」

語音は異様であつたが、はつきり聞えた。与倉中佐が、最期のひく息でさけんだのである。同時に、今朝の産声うぶごえよりも高い嬰兒の声がそこに流れた。後で聞けば、中佐はこの世の最後のひとみに、わが子を見ると、刮かっと一瞬眼をみひらき、手をもすこし挙げて、日本男児万歳をさけぶと、同時に寢床から下へその腕をだらんと垂れてしまったのだそうである。

十三

二月もすぎ、三月もこえ、四月に入ったが、鎮台はなお籠城兵に死守されていた。

「熊本を拔けば、天下の大事はわれにうごく、屍かばね、屍、また屍を踏みこえてつき破れ。われわれの浮沈ふちんは今ここだ」

すでに郷国を立つ時、死別の杯をふくみ、西郷と共に、一死を誓つて来た薩南の健児たちが、時には白刃を手に手に身を投げこみ、時には風を利用して炎と共に迫り、時には山砲

・野砲・白砲きゅうほうを焼き爛ただらして、猛攻また猛攻をつづけて来たが、頑がんとして、鎮台は陥
ちない。

「ふしぎじゃ、ろくに喰べ物も喰つておらん城兵が、こう頑張るとは」

薩軍の池辺いけべ吉十郎きちじゅうろうは、試みに、勸降かんこうじょう状を矢にむすんで、諸所の防寨ぼうさいに射込ませて
みたが、ひとりの城兵も、降伏して出て来なかった。

また三番大隊の辺見十郎太は、植木坂の戦いくさで官軍から獲とった第十四聯隊の軍旗を、竿の
さきひるがえに翻ひるがえして、

「これ見よ」

と、攻囲軍の武威を誇示し、官軍の弱さを嘲ちやうろう弄ろうしたところ、城兵の士気はかえつて

反撥され、

「軍旗は、私のものではない。国家の軍隊の旗だ。不臣な賊軍輩ぞくぐんばらめ、国家を辱はづかしめるか」

と、激烈な小銃弾や砲弾が辺見隊へ集注され、さすがの辺見隊も一時沈黙してしまった。
「城内にはもう役に立つ大砲もないらしいぞ」

大木の上によじ登って見物した村田三介は云った。

「鎮台内の大檜おおひのきを伐り、それで木砲を製造しておる。糧食もとうに無いはず、木の皮

でも喰つておるにちがいない。もう一押し、もう一押しだぞ」

包圍軍はまた、井芹川いせりがわやその他の河流を堰せいて、鎮台のふもとの一方を濁水で浸した。段山だんやまの丘ひとつの争奪戦に、一日のうち、薩軍の死傷百余、籠城方の死傷二百二十五名というような、無茶な肉弾戦も繰返されたが、依然、その防禦線は、死守する台兵の手にあつた。

西郷以下の幕僚が当初から即戦即決を期してかかった作戦は、根本から誤算となつた。薩軍の急迫は、むりもない焦躁しょうそうであつた。なぜならば、こうして思ひのほか長びいてゐる間に、すでに、官軍の征討総督軍せいとうそうとくぐんは、東京・大阪・諸師団の優秀な装備をもつて、疾とくに南下の途についていたからである。

それに、籠城方よりは遙かに優勢な立場にはあるが、攻圍軍全面にわたつて、攻めあぐねた疲れの来ていたことも蔽い得ない。三番大隊・四番大隊・五番大隊、どこを歩いても酸鼻さんびを極めていた。意気はなお旺さかんなものがあつたが、一戦ごとに、一日何度となく、死屍しし負傷者は運ばれてくるし、病人はふえる。いま見る友も夕べにはいないのであつた。大砲小銃もほとんど使い壊こわしてしまい、近頃はもつぱら抜刀隊と鎗隊やりでぶつかつてゆく。そのためにまた、犠牲は激増している。

「ここだ。鎮台の命脈もここ四、五日と見た。もう一押しだ。踏ん張れ。おぬしらも目に
見ていよう。目立って、台兵の瘦せちよろけて来たことはどうか」

指揮官の池上四郎は、そう云って、血ぐさい陣地の味方を激励してあるいていた。途上、
四番大隊長の桐野利秋きりのとしあきに出会々と、利秋も、

「むむ、おれもそう思う。塹壕ざんこうにおける兵のはなしによると、敵の坑あなへ、芋いもや握り飯など
抛ってくれると、瘦犬やせいぬが跳びつくように、台兵のやつが幾つも首を突出すそうじゃ。そ
こをぼんぼん狙い撃ちするんじゃないという。ははは、谷干城がいくら宇土櫓に頑張つても、
もう間はないぞ」

と、哄笑していた。

西郷以下、本陣にある幕僚も、もう時間の問題としていた。敵が鎮台を出て降るか、全
山を自爆して玉碎ぎよくさいと出るか。今日にもあり得ることと信じていたのである。

十四

蜂の巣のような弾痕だ。狭間はざまの壁に、太い柱に。なお、屋根の鯰しやちひさしや廂の瓦などが吹飛ん

でいるのは砲弾の炸裂さくれつによるものであろう。

「児玉少佐。花は咲いたが、今年だけは、春爛漫らんまんという辞句は当らんな。満目の春しゅんで泥いみな荒涼じゃ」

司令部の宇土櫓に立つて、久しぶりに晴れた視野をながめていた谷將軍は、児玉參謀を顧みて、髯だらけな中から白い齒を見せた。

「將軍のお顔もですな」

「髯か。いやこうなると、自分に顔というものがあることすら忘れとる」

「私は、胃袋のあるのも忘れとります」

「ははは、近頃はほとんど、金の粥きんかゆ（粟粥のこと）も、銀の粥（米の粥）も入らんからのう。病院の傷病兵へはどうしておるか」

「病人負傷者だけには、極めて少量ですが、日に一度は金の粥を給与しております。御安心下さい。——が、三千の人間で喰べるというのは怖ろしいものですな。この山には青い木の芽もありません。死馬の肉も尽きました。今に畳も壁も喰わねばなりますまい」

「谷村たにむらはどうしたろうか。途中、薩軍に発見されて捕われておるんじやあるまいか」

「さあ、谷村伍長の結果だけが、今はこの孤城と、南下の途にある總督軍とをつなぐ一縷る

の希望ですが……その谷村計介が変装して鎮台を脱出してからも早一月の余にもなるが、
杳^{よう}として消息はなし、総督軍とも依然、何らの聯絡もとれません」

「ああ……味方の援軍がここに到る時は、遂に、三千の城兵は餓死^{がし}した後か」

「もう着く頃でしょう。どこかに上陸中かも知れません」

「恃^{たの}むまい。天^{そら}ばかり見て待ちこがれても始まらん。兵隊が可憐^{いじら}しいが、餓死するまで戦おう。君も孤塁の鬼となつてくれ」

「いうまでもありません。ただ如何せん、防禦に当たっている兵も、供与してやる食糧がないので、きのうあたりから、生色なしです。弾音もまばらで力がない」

「……ぶつツ」

突然、児玉少佐も將軍も、凄^{すさま}じい爆風の土に顔を噴^ふかれてよろめいた。近くの壁に砲弾が落ちたのである。

間歇^{かんけつぎ}的に起る午後の猛攻撃が始まつたらしい。鉄砲弾の音響は、圧倒的に、包圍軍から発せられるものだった。

櫓は、常に標的になった。忽ち、驟雨のようにばしやばしや撃^うち注^{そそ}いでくる。

「あつ。いかん」

「どうなさいましたか、將軍」

「望遠鏡に弾の破片があたった。レンズが割れたらしい」

「天祐てんゆうですなあ。お取換しましょう、私のと」

「いや、それには及ばんが君……。西出丸の何もない焼け野原や射撃場の辺に、女どもが出ておるが何をしておるのか、見てくれんか」

「え、あんな方にですか。……あつ、成程。……將軍、御夫人です、御夫人です」

「玖満くまこ子か。ほかのは」

「嬰兒を背に負っているのは与倉よくら未亡人らしいです、お妹さんの幹みきどのもおられる。そのほか、共に籠城中の将校や下士や巡査の奥さん達から家族たちまで交じっておるようです」

「何しとるのかね、いったい」

「御夫人以下、みな手籠てかごや箆ざるを持つて、草を摘つみんでおるらしいです。摘草つみくさですな」

「なに、摘草？」

「あつ、文庫ぶんこ址あとへ、砲弾が落ちた。……おお、小銃弾も、ぶすぶすと、近くの土を剝はじいている。これは見ておれん」

児玉少佐は、穴蔵のような階段の下をのぞいて、

「高井軍曹つ、おるかっ、高井軍曹」

「はーっ。参謀、お呼びですか」

「西出丸の先の空地に、婦人たちが出て摘草しとるが、旺さかんにその附近にも弾が飛んでる様子だから、建物の内へかくれるよう云うて来てくれんか。——將軍の命令だと云えつ、早く行け」

「いや、兎玉少佐、抛ほつといてくれ」

「なぜですか、將軍」

「女子たちも、飲んでしておくことじやろ——飲みをもつて」

「はっ、私も、そうとは思いますが。……でも、強しいて危険に身を曝さらさなくても」

「弾丸に身を曝さらすも、飢餓きがにただようも、同じじや。ただ、与倉未亡人までが、乳呑児を負うて出ているのは、余りにもいたいたい。それではわれわれ男児が、かえつて断腸の思いにたえん。愧死きしせねばなくなる。——と、わしが云うとると伝えて、未亡人だけは安全な場所へ連れて行ってくれい。済まんが、君、行ってくれんか」

「承知しました」

高井軍曹が駈けて行つた後から、兎玉少佐も宙を飛んで行つた。

十五

粟^{あわがゆ}粥^{きん}を金の粥^{かゆ}、玄米粥^{くろこめがゆ}を銀の粥などと洒落^{しやれ}ていたのは、もう二十日も前の夢で、焼け跡の味噌や沢庵漬も掘りつくし、馬糧の燕麦も喰べてしまい、およそ喰えそうなものは、土をふるい、木の皮を剥がしてまで胃に入れてしまった。

「弾^{たま}が一発あると、敵を撃とうか、雀を撃つて喰おうかなんて、考えちまうことがあるよ」
頬のこけた籠城兵と、眼のくぼんだ籠城兵とが、塹壕^{ざんこう}のなかで、土蜘蛛^{つちぐも}みたいに首をひそめて語り合っていた。

籠城兵はすぐ、

「ああ、どうしたんだろ、援軍の到着は。おれたちを見殺しにするのか。来るのか、来ないのか」

と、空を仰ぐと嘆息となった。

「もう、来なくてもいい。おれは、煙の出る飯を一杯喰いたい。それを喰ったら死んでもいい。仏壇^{ぶつだん}に上げる飯を、何とか今のうちくれないかなあ」

「ばかつ、日が暮れたぞ。また、今夜も敵の夜襲だ。しつかりせい」

「今夜あたりは、意地でもうごけまい。腹がすいて、胃ぶくろの暴れぬくうちは、まだ体をうごかすとそれを忘れて戦えたが——」

暮れかけている塹壕の上へ、凜々^{りり}しい髪止めをし、櫛^{たすき}をかけた婦人たちの一群が、数箇のバケツをさげて降りて来た。

「皆さん！ 兵隊さんたち！ お味噌汁ですよ。腹いっぱい召しあがって下さい」

「えつ、味噌汁？」

わつと歓声をあげた。バケツと柄杓^{ひしゃく}、婦人たちの配る椀など、間にあわないほどである。

焦^{こげ}くさくて土の交じっているような塩気のうすい味噌汁だ。だが、何か実もはいつている。夢中でふうふう啜^{すす}っていた兵隊も、意外な汁の実^みに出会って一層どよめいた。

「何だ、何だ、この汁の実は」

「青い菜でございます。皆さまが、さだめし青い物に渴いていらつしやるであろうと、谷司令官の奥様が、わたくし達を励まして、きょうの激戦の中を、西出丸の空地まで出て、懸命に摘みあつめて来たのです。——芹^{せり}・嫁菜^{よめな}・野^のみつばなどを」

「えつ、司令官の奥さまが」

「御戦死なすつた与倉中佐の奥さままで、まだ五十日に満たない嬰兒^{あか}さんを背に負つて、弾の来るなかを、芹を摘み、菜を摘んで、あなた方にあげたいと」

「……………」

喊^{かん}声^{せい}も、どよめきも、しいんと熄^やんでしまった。そして彼方此方の暗がり^{はな}で、涙^{はな}をすすめる声^{こゑ}がながれた。手放^{てはな}して泣^ないている兵もあつた。

突然、敵の夜襲^{やせう}を告げる喇叭^{らつぱ}の音が藤崎台でつんぎいた。だ、だ、だツと、赤い火光^{くわく}が闇^{かみ}を翔^かけ狂^{くる}う。どこかで獸群^{じゆうぐん}の吼^ほえるような咥^{くた}がする。

「来たつ。来るぞツ、ここへも」

「畜生^{ちくせい}つ、御座^{ござ}んなれだつ」

「ゆうべとは違^{ちが}うぞ」

塹壕^{ざんごう}の兵は、一斉に部署^{ふしよ}についた。

——来ない、来ない、味方の援軍は来ない。

それとも、熊本附近まではすでに上陸していても、薩軍に遮断されて、こことの聯絡がとれずにいるのか。

いやそんな筈もない。援軍の總督軍はすくなくも何万という大軍であるはずだ。政府の陸海軍である。何で三千に足らない薩軍に阻まれていようか。

孤城の命数はもう旦夕^{たんせき}に迫った。野戦病院の病棟も、その他の建物という建物も、傷病者の呻き^{うめ}でみちている。もうその人たちに与える食物すらない。もちろん藥品や繃帶^{ほうたい}は疾^とくはない。

「皆さま。御苦労ですが、お手のあいている方は、わたくしと一緒に、兵糧蔵までお運び下さいませんか。兵糧蔵まで」

谷玖満子夫人が、外で声を張っていた。

病棟で働いていた婦人たちのうちから十数人がそこへ集まった。

他の棟からも出ていた。何十人かの婦人部隊がすぐ編制された。玖満子はその人々をつれて、焼け残りの兵糧蔵へ向って行つた。

二月十九日の開戦一日前の火災で、食糧の倉庫はほとんど焼失していたが、一部の穀倉

長屋は、救われていた。

と云つても、勿論、その中のものは、^{もみ}粳一粒あまさず喰べ尽してある。經理課属糧食係の柳川中尉は、きよう夫人が突然、その空屋にひとしい穀倉長屋を開けてくれと申し出たので、不審な念にとらわれながら、全部の戸を開いて、

「この通りです」

と、云わぬばかり実証を示していた。

しかし、玖満子夫人は、經理課員や糧食係の怪訝^{いぶか}つていることなど、少しも意にかけず、婦人部隊の全員に、そこへ入って、食物を獲得ことを命じた。

「あるのでございましょうか、何かこの中に」

婦人たちのうちでも怪しんで問う者があつた。

「あります！」

彼女は明言した。

作業が始まつた。

誰の眼で見ても一粒の玄米さえないと思われた穀倉から、一石八斗に余る^{もちこめ}糯米・小豆・大豆・^{もみ}粳・焼き米、いろいろな物が出た。実に山をなすばかり取出された。

どこからそれを出したろうか。無から有が生れたらうか。

理由は簡単であつた。兵糧蔵の屋根裏には、巨材の梁が縦横に組まれてある。梯子をかけて、婦人たちは、梁のうえをのぞいた。鼠糞や塵に蔽われているが、こんもりと盛上がつている小豆やら粃やらが、手で掃けば雨と降つた。

羽目板の目だけを掃いて集めた糯米だけでも、驚くほどの柶に盛られた。

人々が何十年も、土足で踏みつけ踏みつけて、凹凸を作っている倉内の地面にも、掘れば、なお食するに足る物が蔵れていた。箕でより分け、篩にかけて、洗いあげる。

突然。天からでも降つたように、次の日には、塹壕や防柵の陣地にある兵隊たちの手へ、時ならぬ牡丹餅が、幾ツずつか配給された。

「皆さま。ご苦労様でございます。ありがとうぞんじます。御国のためのあなた方の御苦労は、きつときつと、万倍、億倍にもなつて、同胞の上に燿きましよう。大君もおくみとり下さいましよう。神々もみそなわしましよう。やって下さい！ もう一息です！ 百里の道を歩む者は九十里をもつて半ばと思えといひます。あと一押しが勝つか負けるかです。九十九日勝つても、一日敗れたら何もありません。わたくし達女も、何はできなくても、あなた方が戦っている限り、あなた方のうしろにいます。陰にあつて働きます。……

さあ甘くはありませんが、僅かずつですが、この萩の餅は、わたくし達の精いっぱいな心をこめたもの。……召上がつて、戦つて下さい。戦つて下さい」

餅を配る間に立つて、玖満子は、ほとんど兵隊の一人一人へ告げてまわつた。心のうちで伏し拝まぬばかりな真心は、そのひとみから兵のひとみへ燃え映らずにいなかった。

十七

俄然。城兵の戦鬪力は、ふたたび燃えあがつて来た。命旦めいたんせき夕と思われた孤城は、翌日も落ちない。翌々日も落ちない。

「奇蹟だ！……」

と、さすがの薩軍も、その革あらたまった敵の士気が、何に原因するかを知らなかったという。遂にそれからなお、四日も城は保つた。

その日は、病棟の人々へも少しずつ領わけるため、婦人部隊がまた萩の餅をこしらえたが、玖満子夫人は、その幾つかの残りを持つて、ただひとり何処へやら出て行つた。

「さだめし、最後に、宇土櫓うとやぐらのうえにある司令官へ、御自身でお持ちあそばすのであらう」

そう誰しも見ていたところ、彼女は、旧本丸のほうへ歩いていった。そこは惨たる焼け跡であつたが、以前から大玄関の前にあつた「いちよう城」の名のある大銀杏の焼け肌だけが、今はあたりがすべて瓦礫がれきなので、突兀とっこつとひとり聳そびえていた。

——見ると、今日も。

跛行ちんぱをひいた老小使の弁藏べんぞうが、深い井戸から水を汲みあげて来ては、その焼け銀杏の根元へ、水をやつていた。

跛行の老人が汲んでくる水の量は、その大木の根にはまるで灰埃はいぼこりを沈めるぐらいにしか濡れなかつたが、彼はこれを、晴天でさえあれば、一日でも繰返していた。根氣よく根に注いでいた。

「爺じいや……爺じいや」

「おお、奥さまか」

「ご苦労ですね、おまえの丹精で、きつと、焼け焦げたこの銀杏も、新しい芽をふきましよう。おまえの愛だけでもね」

「奥さま。おらは恥かしくつてなりませぬだ。兵隊さんから女衆まで、喰う物も喰わず戦をしていなさるに、この爺は、いつかの雪の晩、鉄砲弾をくらってから、満足に歩くこと

もできず……というて、ただ死んだら片輪になつて弁蔵は氣が変になつただなんて云われ
てもつまんねえ……。そこで思いついた水撒きみずまだあね。この大銀杏は、誰も知つてるとお
り熊本城の名物じやで、ひとが皆、惜しがつてゐるにちがいない。戦はいつか熄やむものだ
しなあ、こんな名物根杏は、何百年もかからなければ、こうは伸びるもんじやない。…
…せめて、こいつでも、おらの丹精で、甦いきかえらせてみよう。そう考えたまででございま
すよ」

弁蔵は、バケツを置いて、めつきり曲りかけた腰をのぼして、その巨木を見上げていた
が、その眼からふいにぼろぼろ涙がこぼれ出した。

「あつ、あつ……あそこの枝に、青い芽らしいものが、出て来ているんじやねえかの。奥
さんつ、おらは眼がわるいだに、見てくだせえ。奥さんの眼で」

「爺や、やはり青い芽がちらと出かけてゐるようですよ」

「そうかあ……。おらも、与倉の奥さまのように、子を産うんだようなもんじやねえかよ。

奥さん、おらも子を産んだ」

「ご褒美ほうびをあげよう。爺や、わたしの製つくつたお萩餅はぎをおあがり……。爺や」

「勿体ねえ。おらには、そんなもの喰う資格はねえ。兵隊さんにあげてくらつしやれ。…

：いや、それよりも、奥さまはきつと、櫓の上にはまだ持つて行かつしやるまい。あの旦那さまだ。この奥様だ。そうだ、きつとそうにちげえねえだ。……叱られてもかまわねえだ、旦那様のところへ、ひと口、持つて行かつしやりませ」

弁蔵に、心のうちをいい当てられて、彼女ははつとしながら宇土櫓の司令部を遠く振仰いだ。

狭間^{はざま}に、良人の影が、小さく見えた。

望遠鏡を眼に当てて。

——が、その望遠鏡は、自分の方を見ているのではなかった。遙か、遙か、熊本の街の西南——^{ひるがすみ}昼霞と空のぼかされた果てを、いつまでも、いつまでも、凝視しているのであつた。

「味方の援軍の先鋒、山川中佐の別動旅団兵、薩軍の包围を突破して、川尻方面から^{まし}慕ぐらにこれへ来るぞつ！ わが征討総督軍は到着したつ！ もう鎮台はゆるがんぞつ——」
児玉源太郎少佐が、満身の声をふりしぼって、將軍のかたわらから告げ渡つたのは、それからわずか後、実に、十四日の午後三時頃であつた。

^{りようりよう}唳々、^{うづば}鳴りわたる喇叭、全山木々にいたるまで、どよめき、狂喜、^{かんこ}喊呼。——そし

て鎮台中、生命^{いのち}あるものすべて、声をあげて泣かぬはなかつた。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「主婦之友」

1941（昭和16）年1月号～2月号

入力：川山隆

校正：雪森

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本名婦伝

谷干城夫人

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>